

コミュニケーション装置としての印刷メディア

活字文化からデジタル文化へ。今、従来のメディアに大きな変容が起きていることは明らかだ。しかし、マクレーンも言うように、新たなメディアの内容を形成するのはそのつど別のメディアである。テレビというメディアの内容が映画とラジオの統合メディアであるように。だとするならば、来るべきデジタルメディアの可能性を探る意味でも、印刷メディアについてさらに考えていかなければならない。ここでは、印刷メディアがそれ以前の声の文化、手書きの文化から、どんな断絶をもたらしたか、その一端を紹介してみたい。



駿河版銅活字による「治」



モリスワのリュウミンRによる「治」

読む・見る 装置としての 印刷メディア

読ませる装置 声の文化から活字の文化へ

通常、私たちが本を読む場合、ページ上の文字を一字一字追っていくのが基本的な動作だ。当然、その際の目の動きは連続したものと思いがちである。ところが、実際の目の運動は決して連続したものではなく、むしろ跳ね回っているという。しかも、その瞬間的な運動は、毎秒3~4回起こり、1秒で200度ほど角度が変わるそうだ。つまり、読むという動作は、この目の運動が停止する間に起こる断続的な行為なのである。

W・J・オングはその著『声の文化と文字の文化』の中で、声の文化から文字の文化への変化を決定的にしたのが西洋の活版印刷だったと言っている。活版印刷以前の、例えば手書き本では、いまだ声の文化に強く依存しているという。当時の人々は、一人で読むときも声を出して読んだと言われている。言うなれば詠むという表現に近い行為であったと言える。しかし活版印刷は、文字のひとつひとつを空間に配置すること(活字を組むこと)によって、読むという行為を視覚行為に変えたのである。この活版印刷による空間の制御が速読や黙読をもたらし、「徹頭徹尾、冷たい



写本による聖書(部分)

非人間的な事実の世界」を作り出したというわけである。

このような視点で印刷の歴史を振り返ると、印刷技術は、可読性を追求すること(紙面に秩序をもたらすこと)で発展してきたという一面が見えてくる。しかし、冒頭にも紹介したように、私たちの目の運動は、それほど秩序だっているわけでも、機械的なわけでもない。書体や文字の組み方、ブックデザインなどにおいて、可読性より美的なものを追求するという動きも一方で起こるのである。



ケルムスコット・プレスによる『ジョーサー著作集』

例えば19世紀末のイギリスでは、ウィリアム・モリスらによってケルムスコット・プレスと呼ばれる書籍が何冊か刊行される。これらの書籍は華やかな挿絵と重厚なゴシック書体で埋め尽くされており、可読性は必ずしもよいとは言えない。しかし、印刷物を芸術の域にまで高めた書籍として高く評価されている。

こうした印刷上、デザイン上の工夫は、オングが指摘する活版印刷による「非人間的な事実の世界」への抵抗だったと言えなくもない。が、むしろ読ませる装置としての印刷上のさまざまな工夫は、声の文化が持っていた唯一性(一瞬で消えるという声の真理=神の声)を視覚化して、永遠に残したいという祈りにも似た精神性に深く起因しているのではないだろうか。

見せる装置 図版印刷と近代科学

活版印刷の発明は、読むというコミュニケーション行為にだけ変化をもたらしたわけではない。見るという行為にも大きな影響を及ぼした。もちろん、活版印刷以前の手書き本においても、テキストに挿絵や装飾をほどこすことは行われていたが、活版印刷術の発展につれて、挿絵の装飾方法は大きく変貌していったと言われている。

活版印刷以前と以後では、書物における挿絵や図版の役割、あるいは影響はどのように

変化したのだろうか。前述したように、手書き本にも、手で描かれた専門的な図版が使われていた。しかし、手書き本では、何度も書き写されているうちに正確さが落ちていったことは否めないだろう。もちろん、正確に視覚情報を伝えるために版木を使用した図版の複製も可能ではあった。

しかしやはり、視覚情報を何度も正確に反復させるためには、活版印刷の出現を待たねばならなかった。活版印刷術の発明に始まる印刷技術の進歩によって、テキストが正確に大量に複製できるようになり、それにともない図版の印刷も木版から、より精密な金属版へと技術革新が進んでいった。こうした印刷技術の発展によって、精緻な図版入りの印刷物が大量に刊行されるようになり、人々は言葉だけでは理解できなかった事実気付かされることになった。



ヨンストン『禽獣魚介蟲図譜』(部分)



クルムス『ターヘルアナムトミア』(部分)

再び、オングの言葉を借りれば、「ダーウインの進化論的生物学は印刷の世界の産物」なのである。明確な言葉と精緻な図版が結びつくことで、人々はこれまでとは違った目で世界を見ることができるようになった。こうした正確な視覚情報の反復をもたらす、見る装置としての印刷メディアこそが近代科学の誕生をうながして、新しい認識の世界を切り開いていったのである。

伝える装置 新聞と印刷技術の進化

最近でもまだ、雑誌や新聞のことを「プレス」と呼ぶ慣習が残っている。雑誌や新聞に携わる人を「プレス関係の人」と呼ぶのを聞いたことがある方も多いと思う。もともこの言葉は、ドイツ語で印刷機を意味する「プレッセ」に由来する。これはグーテンベルクの活版印刷技術が、ぶどう搾りに使う「プレス」と油性インク、そして鉛合金の活字から生まれたことによる。それが次第に意味が限定され、19世紀になると日刊あるいは定期的な刊行物全体を指すようになった。

こうした定期刊行物が後の新聞の起こりである。言うまでもなく、新聞は印刷技術の発展を抜きには語れないメディアのひとつだ。15世紀後半に活版印刷術が開発されるとすぐさま、新しい出来事を定期的に伝える印刷物が出てくる。ただし、この頃の刊行物は、現在のような新聞の形態ではなく、表紙と奥付のついた本の体裁であった。

新聞が現在のような形態になるには、印刷技術や地域的な流通体制が整う18世紀まで待たなければならない。実際、18世紀から19世紀にかけて印刷機の改良が急速に進んだ。なかでも、1811年に、ドイツ人のケーニヒによって考案されたロール型印刷機は、印刷の生産性を飛躍的に高めた。1820年頃には、ケーニヒ印刷機により、1時間に1000部を刷れるようになった。この頃のパリの新聞『ジュルナル・デ・デバ』は発行部数1万5000部を誇り、イギリスの『タイムズ』の1万部を凌いでいたという。

まさに19世紀は、印刷技術の進化が新聞発行部数を左右する重要な要素であった。1840年には、アメリカ人のリチャード・ホーが回転印刷機を発明し、1時間に2000部へと印刷能力を高めていった。続いて1846年には、ホーは輪転機の第一号を開発している。

人類の活動範囲が拡大するにつれ、情報の正確さはもちろん、情報の流通にスピードが求められるようになった。いかに速く正確な情報を流通させられるかが、印刷技術を発展させる大きな要因のひとつになるのである。それにともない、情報(かつては神の声であった)に接する我々の態度も変化してきた。

言葉を視覚化した印刷は、やがて大量複製技術へと変貌し人々のコミュニケーションに大きな影響を及ぼすことになった。デジタルという技術を得た印刷は、これから我々のコミュニケーションをどう変えていくのだろう。



東京日日新聞 第186号(明治5年)

参考文献:
『読書の歴史』
アルベルト・マンゲル著(柏書房)
『声の文化と文字の文化』
W・J・オング著(藤原書店)
『本と人の歴史事典』
原田範行・高宮利行著(柏書房)
『ザ・ニューズペーパー』
アンソニー・スミス著(新潮選書)